

## 第1学年 国語科の実践

1. 単元名 おはなしをたのしもう「たぬきの糸車」(全10時間)
2. 単元目標
  - ◎語のまとまりや言葉の響きなどについて考えながら音読する。(読む)
  - ◎登場人物の行動を中心に、場面の様子について注意して読み、想像を広げる。(読む)
  - たぬきやおかみさんになったつもりで本文にない言葉を考えて絵に合うように書く。(書く)
3. ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

### 【国語科の学習について】

国語科の学習では、声に出す、動作をつけるなどの活動を楽しみながら行ってきた。物語も大好きで、毎朝の教師による「3 ページ読み聞かせ」や図書館コスモスで行われる紙芝居等をいつも楽しみにしている。図鑑や絵のみで構成されている本を好む子には、意図的に本を紹介するようにし、物語を手にとることに少しずつ慣れることができてきた。

### 【聴く・話すについて】

表現することが大好きで、「話すこと」への意欲が高い児童が多い。その意欲を活かし、「誰に話そうか？友達に聞こえているかな？」「友達は、話しやすいかな？」と、常に相手に目を向けるような問いかけをしながら、相手意識をもって話したり聴いたりするよう指導してきた。特に「聴くこと」については、「友達がどんな聴き方をしてくれたら、嬉しいかな？悲しいかな？」と投げかけ、『ぼくたちのクラスの“こんなききかたうれしいね”』を児童と一緒に考え、確認してきた。普段の授業内で「話す・聴く」指導を行うだけでなく、朝の会でスピーチ活動を行い、継続して『こんなききかたうれしいね』を確認する場を設けてきた。そうすることで、少しずつ意識しながら話したり聴いたりすることができるようになってきた。

### 【ひびき合いについて】

聴く・話すの指導を行うことで、友達の意見を「聴ける」、そしてそれを受けて「反応できる」「話せる」ということが、だんだんとできるようになってきた。話し合っているうちに、話題が逸れてしまったり、時間が経つと興味がなくなってしまうこともあるので、その度に、話題の確認をしたり、テンポ良く話が進められるよう助言したりし、ひびき合いにつながるよう、指導を続けてきた。

## 4. 単元と指導について

### ①単元について

<学習指導要領「読むこと」(1)ウ:場面の様子について登場人物の行動を中心に想像を広げながら読む>の目標達成に向けて、国語の授業では、「動作化しながら読む」「吹き出しに書き込みをして登場人物の気持ちを想像する」といった手立てをとり、主に一斉指導によって場面の様子を読み深めてきた。そうして読んできたことを活かして、これまでに、「おむすびころりん」「おおきなかぶ」「くじらぐも」を紙芝居や音読劇にしてきた。6年生や保護者に向けて発表した作品もある。そのような経験をした学習後には、体を使って表現したり、声に出して読んだりすることがもっと好きになった、またやりたいという声が多数あがった。その意見から、「次のお話も、音読発表会をしよう」という流れができ、発表する作品の候補として挙げたのが、「たぬきの糸車」である。

主教材「たぬきの糸車」は、伊豆地方の民話を基にした作品である。物語は、山奥の一軒家でいたずらを繰り返すたぬきを捕えるために、きこりがわなをしかけるところから始まる。たぬきはいたずらものだが、どこか憎めない可愛らしさをもっており、そんなたぬきにおかみさんは次第に愛着をもつようになる。毎晩毎晩やってきては糸車を回す真似をするたぬきをおかみさんはかわいがり、ついにはきこりが仕掛けたわなを解き、たぬきを助けてしまう。命からがら逃げたたぬきは、恩返しにと、きこりの夫婦が留守にしている冬の間、糸車を回して、糸を紡ぐ。糸車を通して出会い、関わり合っていくうちに、いつしか二人の心は変化していくのである。たぬきとおかみさんの心の交流が作品の柱となっている、心あたたまる物語である。やぶれ障子の穴からのぞいたり、やりたくてたまらなかった糸車を回し喜々として帰っていくたぬきの姿はどこかユーモラスで、子どもが同化しやすいキャラクターである。また、あたたかい人柄のおかみさんにも自然に感情移入できると考える。さらに、この作品は、文章中にたぬきの会話文が一つもないという特徴をもつ。おかみさんの会話文もたった三つだけである。このような特徴のある物語は、自由に想像を膨らませて読むことができる作品であると言える。地の文から、登場人物の行動を読み取り、たぬきやおかみさんの内言(※)を豊かに想像する。そうした活動が、<学習指導要領「読むこと」の目標>の達成に最適であると考えている。(※内言…発声を伴わずに自分自身の心の中で用いる言葉。)

## ②指導について

### 【单元における指導観・願い】

「たぬきとおかみさんの心の交流」が描かれているこの不思議な物語の世界に、児童を十分に浸らせたい。そして、作品を楽しんで読む経験を通して、物語が好きな子を育てていきたいと思う。場面の様子を豊かに想像し、作品をより楽しんでいくために、「やぶれ障子」や「糸車」の模型を用意するなど、具体物を使って、物語の中に飛び込んだかのような場作りをする。そして、それらを用いて動作化しながら読み深めていく。また、話の中には難語句も出てくるので、一つ一つ丁寧に、意味を確認する時間をとる。さらに、自力読みが困難な子どもも少なくないので、場面ごとに区切って読み、確実に理解をしてから、物語を読み進めるようにしていきたい。

会話文がほとんどない作品であるので、想像は広がるが、想像のみに頼った読みにならないよう注意したい。文章を読み始めて半年の児童であるので、文章から見つけた根拠を付け加えながら意見を述べるのはまだまだ難しい段階であるが、思い込みで読み進めず、言葉や挿絵を大切に読みようにしていきたい。そのために教科書への書き込みを行う。自由な想像をするだけに終わらず、文章から読む経験をし、次年度以降の学習へとつなげていきたい。

書き込んだことは授業内で全体交流する。その後、挿絵につけた吹き出しに登場人物の気持ちを書くことを、一時間の学習のまとめとしたい。交流をすることによって、自分にはない意見が聞けたり、自分の考えに自信が持てたりする。友達の意見を聴いた後、自分の考えを再構築する時間として、吹き出しへの書き込みという活動を設定した。

### 【切実な問題について】

前述の通り、4月から様々な物語を、紙芝居や音読劇などにして発表してきた。その経験から、「またやりたい。」「次の物語も発表したい。」との声があがり、「たぬきの糸車」が発表する作品の候補となった。そこを単元の始まりとし、「音読発表会を開こう」を単元の最終目標にして、学習に取り組んでいきたい。まずは、題名読みをし、作品に興味を持たせてから、全文通読することによって、作品への関心が高まると考える。作品を読むと、登場人物の会話文がほとんどないことに、すぐに気づくはずである。「せりふがないからよく気持ちが分からない。」「気持ちを考えないと音読劇ができない。」といったことから、「音読劇をするために、登場人物の気持ちを想像したい。」と、考えるであろう。それが切実な問題になるのではと考えた。

### 【ひびき合いについて】

登場人物の気持ちを交流する中で、友達の考えを受け止め、素直に自分の思いを表現する姿をひびき合いの姿としたい。具体的には、「それいい考えだね。」「ぼくも一緒の考えだよ。」と共感したり、「自分は違う考えだよ。」「こっちの方がいいと思うよ。」と違いに気づいたりする姿である。そうして交流していく中で、自分の考えが広がったり変わったり、また、考えを持てていなかった子が持てるようになっていくことを期待する。

本時では、四の場面の「糸車を回していたたぬきの気持ち」について、考えを交流する。糸車を回せて喜ぶ気持ちだけでなく、「おかみさんに助けられたことを恩返ししたい」という気持ちも含まれていることに気づく児童もいるのではないかと考える。友達と交流する中で、多様な面からの豊かな読みができるようになる姿を、本時でのひびき合いの姿としたい。

5. 単元構想

単元 目標	◎語のまとまりや言葉の響きなどについて考えながら音読する。 ◎登場人物の行動を中心に、場面の様子に注意して読み、想像を広げる。 ○たぬきやおかみさんになったつもりで、本文にない言葉を考えて絵に合うように書く。
----------	--

—— 作品の柱:糸車を通して行われるたぬきとおかみさんの心の交流 ——

※単元導入前の学習…読み聞かせの継続(毎朝の3ページシリーズ)。

※子どもたちの4月からの国語学習の様子…「おむすびころりん」「おおきなかぶ」「くじらぐも」を音読劇などにして6年生に向けて発表してきた。

・楽しかったね ・上手にできてほめられて嬉しかった ・また音読発表会をしたいな

**学習計画を立てよう ～音読発表会に向けて～**

—「たぬきの糸車」の題名読み・全文通読をし、作品を子どもたちに紹介する。—

・面白いお話だね ・このお話でやってみたい ・たぬき役をやりたいな ・でもせりふがないよ ・つけたせばいいんだよ  
 ・おおきなかぶでもくじらぐもでもつけたしたよ ・気持ちを想像すればできるよ ・気持ちを読んでいこう ・そうしたら音読も工夫できるね

<b>発表に関することを決めよう</b> ・いつ? ・誰に向けて? ・誰がどの場面の何を音読する役?	<b>「たぬきの糸車」学習のめあてを立てよう</b> めあて:おんどくはっぴょうかいをするために、 とうじょうじんぶつのきもちをよみとろう
--	---

音読発表会のために

**登場人物の気持ちを読みとろう**

<b>【一の場面】</b> ・物語の設定場面。 ・きこりの夫婦といた ずらたぬき	<b>物語の場面を想像する</b> ・人がいないところ ・山奥。町でない。 ・きこりの夫婦だけ。	<b>たぬきのきもち</b> ・楽しいな ・人がいないからやっちゃえ ・毎晩やりたくなるほどだ ・一人ぼっちでつまらないからいたずらしたい → <u>きこりがわなをしかける</u> (それほどの困り感)	押さえたい難語句 「糸車」 「山おく」「きこり」 「一けんや」「わな」
<b>【二の場面】</b> ・糸車とたぬきの出会い ・その姿に愛着をもつお かみさん	<b>たぬきのきもち</b> ・回すのは楽しそう・ぼくもやってみたい ・真似したら目も回っちゃったよ ・気に入った・でも中には入れないなあ	<b>おかみさんのきもち</b> ・面白いたぬきがいるなあ・回したいのね ・かわいい姿を見ていたいから黙っていたよ →いたずらたぬきの思いもよらない姿に心奪われる	「つぶぐ」「ふき出す」 「やぶれしょうじ」
<b>【三の場面】</b> ・わなにかかったたぬきを 思わず助けるおかみさん	<b>たぬきのきもち</b> ・助かったよ ・ありがとう ・わなをしかけるなんて、人間は怖い ・この人はいい人かもしれないなあ	<b>おかみさんのきもち</b> ・かわいそうに ・助けてあげよう ・かわいいから逃がしてあげたい ・毎晩来ていたからかわいくなっちゃった	「ばん」「こわごわ」
<b>【四の場面】★本時</b> ・冬の間、糸をつむいでい たたぬきと、その事実を 知り驚くおかみさん	<b>たぬきのきもち</b> ・回すの楽しいな ・やっと触れて嬉しい ・助けてくれたお礼につぐぐよ ・おかみさんを喜ばせたいな →嬉しい気持ちだけでなくお礼の気持ちも持っている	<b>おかみさんのきもち</b> ・あたたぬきだ ・やっぱり回したかったの ・冬の間、ずっとやっていたのかな ・あのとのお礼? ありがとう	「いたの間」「土間」 「いたど」「手つき」
<b>【五の場面】</b> ・満足感に浸るたぬきの様子	<b>たぬきのきもち</b> ・楽しかった ・ずっとやりたかったことが できてうれしい ・おかみさんにお礼もでき て、満足だ	<b>おかみさんのきもち</b> ・きっと回せてうれしかったんだね ・たくさん作ってくれてありがとう ・また回しにおいで 待っているよ	「ふいに」

**すべての場面をつなげて音読の練習をしよう**

・みんなの考えたことを活かして音読しよう ・みんなと一緒に練習しよう ・発表会を成功させるぞ

**音読発表会をしよう**

・上手にできたよ ・お話を讀むって面白いなあ ・また他の物語も読んでみたいなあ →日々の読書活動へつなげていく

## 6. 本時について

(1) 話し合いを通して、おかみさんへの感謝の気持ちをもちながら糸車を回すたぬきの気持ちを読み取ることができる。

### (2) 本時展開

学習活動		主な支援・留意点【評価】
<p>④ まとめたことを、はっぴょうしよう</p> <p>③ たぬきの気持ちを、ふきだしにまとめよう</p> <p>② たぬきの気持ちを、はっぴょうしよう</p>	<p>① 糸車をまわすたぬきのきもちをかんがえよう</p> <p>② 全体で話し合おう</p>	<p>・全体での話し合いの前に、自分の考えを表現する場として、ペアで発表し合う時間をもつ。</p> <p>・想像だけの話し合いにならないよう、前時までに本文への書き込みを行い、それをもとに発言するように指導する。自信をもって発表できるように、書き込みへ事前にコメントをつけておく。</p> <p>・動作化を取り入れたり、学習歴を利用して前の場面を想起したりしながら、場面の様子が理解できるようにしていく。</p> <p>・「回せて嬉しい」気持ちだけでなく、「助けてくれたお礼」の気持ちも持ちながら、糸車をまわすたぬきの気持ちに迫るようにしていく。</p> <p>・交流後、自分の考えをまとめるために、ふきだしにたぬきの気持ちを書く。</p> <p>◇読み取ったことを進んで話し合おうとしている。 【関心意欲態度】</p> <p>◇場面の様子に注意して読み、想像を広げながら、たぬきの気持ちを語る【読者】</p>

○「たぬきは、糸車を回すことに憧れを抱き、自分も回したいという思いから、毎晩毎晩おかみさんのところへ通って行っていた。自分もずっと回したかった。」というのが、これまでの子どもたちの読みである。その読みと4場面をつなげて、「ずっと回したかったから、4場面のたぬきは、回せて嬉しい」と想像している子が多数いる。しかし、本時では、「嬉しい」気持ちだけでなく、「三場面ですべてお礼」の気持ちも持ちながら糸車を回すたぬきの気持ちに、交流を通して気づくようにしていきたい。

○また、話し合いをした後に、ワークシートを使って、たぬきの気持ちを吹き出しにまとめる時間をもつ。これは、友達と話し合って自分の考えが強まったり広がったりしたことを、児童自身が実感できるようにするためである。また、その吹き出しに書かれたことから、一人一人のひびき合いの結果を見とりたい。

## 7. 実践を終えて

音読すること、動作化することが大好きな子どもたちであるので、その特性を活かし、年度初めから国語の授業では、様々な物語教材を紙芝居にしたり音読劇にしたりしてきた。その流れから、「たぬきの糸車」も、「音読劇にしたい」という子どもたちの思いから、学習が始まった。

全文を読むと、子どもたちは「音読劇にしたいけれど、登場人物のせりふがないから、気持ちがわからない。だから音読ができない。」という問題を持った。その解決のために、場面ごとに登場人物の気持ちを読み取っていくこととなった。また、「このお話には、よくわからない“はてな”がたくさんある。」ということも、子どもたちにとって、大きな問題となった。子どもたちから出された“はてな”は以下の通りである。

- ・一場面・・・たぬきは、なぜまいばんのようにいたずらをしたのか。  
きこりは、なぜわなをしかけたのか。
- ・二場面・・・おかみさんは、なぜ「いたずらもんだがかわいいな。」といったのか。
- ・三場面・・・おかみさんは、なぜたぬきをにがしたのか。
- ・四場面・・・たぬきは、なぜ糸車をまわしていたのか。
- ・五場面・・・たぬきは、なぜうれしいのかえっていったのか。(にげていったのか。)  
おかみさんは、なぜたぬきをおいかけないのか。

この“はてな”を解決するためにも、その場面ごとの登場人物の気持ちを読み取りたいという思いが、子どもたちの読み取りへの意欲を高めていった。

本時では、四場面の「糸車をまわすたぬきのきもちをかんがえよう。」が、学習問題となった。「たぬきさんは、二場面では、おかみさんが回すのを見ていただけなのに、なぜ四場面では回していたのかな？」という疑問を解決したいとの思いが子どもたちにはあった。そのことから、本時の学習問題は、子どもたちにとって切実な問題となっていたと考える。本文への書き込みを行い、それぞれたぬきの気持ちと考え、意見を活発に伝え合うことができたが、本時では読みを十分に深めていくことはできなかった。たくさんの意見が本時では出されたが、どの意見がよかったのか、十分に検討されないまま、授業が終わってしまったので、教師から焦点化していくような発問をすることが必要であった。また、子どもたちの意見には“ずれ”があったが、それに子どもたちがはっきりと気づけないままになってしまっていたので、気づきを促せるような板書の工夫も必要であった。そうした課題の残る授業であったので、ひびき合いによってねらいにせまっていくような授業へは、今一步及ばなかった。また、教師が導いて、授業が展開されていったが、今後は、子どもたちの言葉でつないでいけるようになることも、本学級の課題である。それができるようになってこそ、子どもたちの手で作る授業になると考える。

成果としては、年間を通して、相手意識をもって「話す・聴く」ことができるようになったことで、ひびき合いの土台となるものができたことが挙げられる。年度当初は、教師に話すことで満足していたが、友達を意識して話したり聴いたりすることを、何度も繰り返していくうちに、自分の意見と同じか違うかということが、だんだんとわかるよう

になり、「〇〇さんといっしょで」「〇〇さんちがって」という言葉を使って、意見を言うことができるようになってきた。また、「つけたし」や「しつもん」ができるようになり、読みを深めていくことができるようになった。さらに、本文や吹き出しへの書き込みをし、意見交換を経験することによって、物語を読む楽しさを味わい、読むことが楽しくなったことも、成果として挙げられる。本単元終了後、別の物語教材を学習した際に、「この物語も“はてな”があるね。“はてな”を解決したい。」という声があがり、みんなで読み深めていくことを楽しみにしていることが見てとれた。書き込みも、次の教材では、一人で自信をもってできるようになった子が何人もいた。本単元を学習することで、読むことの楽しさが子どもたちに伝わったこと、そして自信をもって書き込んだり意見を言ったりすることができるようになったことが、子どもたちの様子から伺え、大変嬉しく思った。

今後は、課題として残った部分への研究に取り組み、ひびき合いのある授業を目指して、さらなる研鑽を積んでいきたい。